

はじめに

本書には、京都におけるさまざまな歴史災害について、歴史学だけでなく広い分野から学際的に取り組んだ研究の成果を掲載している。ここでいう歴史災害とは、過去に発生した災害のうち、史料（古文書や古地図など）が残っていて、ある程度復原が可能な災害をいう。たとえ歴史時代に実際に災害が起こっていたとしても、被害が小さかったり史料が存在せずに実態を把握できないものについては扱えないことになる。

ところで、本書が刊行されるにいたった経緯について触れておこう。編者らが歴史災害を本格的に扱うようになったのは、立命館大学が平成一五年の文部科学省の二一世紀COEプログラムに「文化遺産を核とした歴史都市の防災研究拠点」というテーマで採択されて以降のことである。ここでは、編者の吉越昭久と片平博文の他に、山崎有恒、冷泉為人（特別招聘教授）が研究推進メンバーになっている。平成一七年度からは高橋学が、平成一八年度からは岡田篤正（特別招聘教授）が新しく研究推進メンバーに加わっている。平成二〇年度には、「歴史都市を守る「文化遺産防災学」推進拠点」というテーマでグローバルCOEプログラムに採択され、前述の六名が研究推進メンバーになった。本書の執筆者には、この二つのCOEプログラムの研究推進メンバーの他に、特別招聘教授・研究協力者・客員研究員・日本学術振興会特別研究員・ポストドクトラルフェロー・リサーチアシスタント・大学院生などとして関わりを持ち、研究を支えていただいた方々を含んでいる。

これらの研究プログラムにおいて、研究推進メンバーは以下のような認識にたつて、研究を進めてきた。つまり、これまでは「文化遺産」や「防災」というそれぞれの分野の研究はかなり行われてきたものの、その両者が

かかわる「文化遺産防災」についてはほとんど扱われてこなかったという課題があった。そのために、立命館大学では文化遺産防災に焦点をあてて研究を進めることにしたのである。

文化遺産防災の研究においては、これにかかわる事業を推進したり、計画をたてることが最終的な目標であった。その中に、編者らの歴史災害を研究するグループが作られた。

編者らはまず京都における歴史災害を明らかにし、それをできるだけ正確に復原することで、過去の災害の特徴を捉えようとした。ここでは、どのような災害が、いつ、どこで発生してきたのかを明らかにすることが重要であった。その結果をもとにして、歴史災害から防災の知恵を抽出することを次の段階として目指した。過去の人々の優れた知恵を、将来的な防災事業や計画に取り込むことができれば、地域に根ざした優れたものになると考え、これを歴史災害のグループの最終的な到達点に据えてきた。

歴史災害の復原は大きな広がりをもせるようになったが、グローバルCOEプログラムの最終年度を迎えるにあたり、これらの歴史災害の研究過程で明らかにされた成果をまとめて世に問うことは意義があると考え、本書の出版にいたった。

本書では、水害・火災・震災・土砂災害・気象災害の五種類の主として自然災害に関わる歴史災害を扱った。災害の分類を厳密に行うことは難しいが、他にも疫病・虫害・風害・冷害・雪害・旱魃渇水などの災害がある。

しかし、京都においてはこの五種類が主要な災害と考え、そこに絞り込むことにした。

本書が対象とした地域は、京都である。狭く捉えるなら、近世における都市域であった洛中となるが、災害はその周辺地域も含めて影響が及ぶ場合があるために、少し広げて京都盆地を主な対象地域とした。文政京都地震は、震災が亀岡と考えられているために、これを扱う章に限り亀岡盆地までを含めることとした。

次に本書で扱った時期についても触れておきたい。厳密に言えば、現在より以前の災害はすべて歴史災害ということになるが、一般的には古代から第二次世界大戦までが対象にされている。しかし、本書で扱った災害は、近世の時期に関するものが最も多くなつた。

本書の構成であるが、「はじめに」と「おわりに」の間に六部を設け、そこに複数の章を置いた。各部は、全体の概略を述べた「概要」、二から五つの章、内容に関わるコラムがあるという点では共通している。以下、順を追って概略を記してみたい。

I部は総論で、歴史災害の考え方や技術的対応を述べた章である。吉越は歴史災害の復原から減災の知恵の抽出にいたる概要を述べ、塚本はGIS（地理情報システム）を用いた歴史災害の可視化という重要な技術に触れている。

II部は水害で、高橋は鳴川・桂川の水害を、片平は賀茂川の洪水を、吉越は鳴川の寛文新堤を扱い、最後に山崎が明治期の治水問題のコラムを書いている。

III部は火災で、渡邊は天明の大火を、冷泉は公家町の火災と復興を、奈良は幕末の戦乱にともなう火災を、朝田は新聞を用いて大正期の火災を、田中は歴史的建築物の火災履歴をそれぞれ扱い、最後に片平が安元の大火に関するコラムを記している。

IV部は震災で、岡田が活断層からみた地震環境を、寒川が遺跡からみた地震災害を、川崎が京都御所の地震殿を、西山が近世の京都に被害を与えた三つの地震を、北原・大邑が文政京都地震という具体的な地震災害を扱っている。最後に伊津野が、清水寺と地震の関係をコラムにまとめている。

V部は土砂災害で、諏訪が東山の土砂災害を、赤石が昭和一〇年に起こった山地部の水害を扱い、最後に深川

が清水寺の地盤に関するコラムを書いている。

VI部は気象災害・災害と社会で、水越が火災と気象の問題を、鈴木が近代の病災と衛生行政を、小林が迷子しるべ石の意味を災害と関わらせて述べている。最後に中谷が、京都における病気の問題をコラムにしている。

本書は初めから終わりまで順を追って読み進めなくても、気になったところから読み始めていただければよい。一つの章は、部に含まれる他の章と有機的なつながりを持つてはいるが、それぞれ独立し完結した内容となっているためである。

本書では、まだ充分とはいえないまでも、歴史災害に関する一つの体系を提示したつもりである。全体に目を通していただければ、それが実感できると考える。また、そこではさまざまな点で新機軸を提示できたとも考えている。たとえば、歴史学だけでなく地理学や地震学、地球科学など多くの分野からそれぞれの得意な方法を使って歴史災害を明らかにしていることもその一つである。つまり、歴史災害を学際的にとりあげているのである。さらに、被災域を時空間的に明確にしたことも大きな特徴で、特にGISを用いた表示方法はこれまでの研究にない新しい成果となった。

このような形で、筆者らは文化遺産防災に関する研究の一部として出発させた歴史災害の研究成果（『京都の歴史災害』）を、世に送り出すことができた。前述のようなくつかの新しい特徴をもつ本書は、歴史災害を広く認知させることになるだけでなく、今後特に歴史学からの反応や議論を引き起こすことになることも、願っているところである。

前述したように、本書ではすべての種類の歴史災害を解明した訳ではない。また、防災の知恵の抽出やその応用に関しては、まだ充分ではないという課題も残されている。これについては、今後時間をかけて研究を進めて

行かねばならないと考える。

文化遺産防災には、学問的に貴重な部分と、極めて実用的な部分とがあって、この両者のバランスの取り方が重要である。どちらかに偏り過ぎれば、あまりにアカデミックになったり、あまりに実務的になり過ぎる危険性を秘めているのである。このさじ加減は難しいが、適度なバランスをとらなければならないことはいうまでもない。

歴史災害の研究は、このところ多少世間に知られるようになってきたのではないかと感じている。この動きを継続させるためには、次の世代の研究者たちにこの研究が役に立つことだけでなく、研究としても魅力があることを知ってもらわなければならない。それは、著者らの取り組むべき課題であろう。

本書をどのようにお使いいただくかは、読者の皆様にお任せするしかないが、編者としては歴史災害の全体像を捉えるために、国や地方自治体などにおける実務に、教科書に、研究の参考書になどと、さまざまな目的にお使いいただければありがたいと考えている。

吉越 昭久

片平 博文

はじめに

I 総論

歴史災害の復原から明らかにされる減災の知恵 吉越昭久 3
 地理情報システムによる歴史災害の可視化 塚本章宏 15

II 水害

近世における京都鴨川・桂川の水害 高橋 学 33
 一七世紀後半における賀茂川の洪水と堤防の建設 片平博文 46
 京都・鴨川の堤防建設にみる近世の治水観 吉越昭久 64
 「コラム1」 明治期の治水問題と現代 山崎有恒 75

III 火災

近世京都の大火 渡邊泰崇 79
 江戸時代の京都・公家町における災害と復興 冷泉為人 91
 ——京都御所を中心にして——

幕末の戦乱と火災 奈良勝司 103

大正期京都の火災の復原——『京都日出新聞』とGISを用いて—— 朝田健太 118
 京都市における歴史的建築物の火災履歴の復原 田中喙義 135
 「コラム2」 安元三年の大火と風向 片平博文 146

IV 震災

京都周辺の活断層からみた地震の環境と長期予測 岡田篤正 151
 遺跡と史料からわかる地震災害 寒川 旭 170
 京都御所の地震殿と歴史災害 川崎一朗 183
 近世京都における地震災害 西山昭仁 195
 文政京都地震——地形と被害の関係についての考察—— 北原糸子・大邑潤三 209
 「コラム3」 大地震でも清水の舞台は壊れない 伊津野和行 231

V 土砂災害

京都東山の土砂災害 諏訪 浩 235
 近代の水害と土砂災害——昭和一〇年京都市大水害を例に—— 赤石直美 248
 「コラム4」 清水の舞台下斜面は「縁の下の力持ち」 深川良一 260

VI 気象災害・災害と社会

近世京都の重大火災と気象条件……………水越允治 265

近代の医療と防災——近代の病災コレラと衛生行政の展開——……………鈴木栄樹 276

「迷子しるべ石」をめぐって……………小林丈広 290

〔コラム5〕 歴史災害としての疫病と京都……………中谷友樹 300

おわりに——「水」と「火」の記録から——

執筆者紹介

I 総論

● 歴史災害の復原から明らかにされる減災の知恵

吉越 昭久

一 はじめに

歴史災害とは過去に発生し、史料（古文書や古地図など）が残っていてある程度復原が可能な災害をいう。厳密にいえば、現在より以前のもはすべて歴史災害ということになるが、本章では主として近代以前の災害を対象におきたい。実際に災害が起こっていたとしても被害が小さかったり、史料が存在せずに実態を把握できないものについては、対象に含めないこととする。

いうまでもないが、たとえば河道から堤内に水が流入したとしても、そこに被害を受けるものがあるかどうかで、単なる自然現象か災害かに区別される。したがって、歴史的に大きな自然現象があったからといって、そのすべてを災害と認識できるとは限らない。

このような歴史災害を復原することで、そこから学ぶべきことはいろいろあろう。まず、災害の特徴を知ることである。それは、経年性（周期性があったか、いつ頃に多かったのか）、季節性（どの季節に多かったのか）、地域性（どこで多かったのか）などに関することである。これらの結果からは、過去の人々の災害への対応や考え方

を知ることができる。これは言い換えれば、減災の知恵を学ぶことでもある。そして、最終的には減災の知恵を今後の防災計画や事業などに活用することで、災害への対応策を講じる必要がある。本章では、以上のようなプロセスを中心に記述してみたい。

ところで、筆者も含めて現在立命館大学で進めているプロジェクトで研究対象にしている「文化遺産防災」を例にとるならば、最新の高度な技術を採用することでかなりの被害を防ぐことはできるであろう。しかし、そのためには多額の費用と大きなエネルギーを必要とすることになる。仮に地震などが発生した場合、電力などのエネルギー供給が止まれば、その段階でこの高度な技術を採用した防災システムは作動しなくなる。また、多額の費用と大きなエネルギーを要するこのような防災システムは、世界のどこにでも適用できるとは限らない。このため、廉価で、しかもエネルギーの供給が止まっても作動しうる自然エネルギーを使用するシステムの採用が望まれる。しかもそのシステムを単純にすれば、被災後にも稼働する可能性が高くなるし、修理も容易なものになる。このようなことに関するヒントは、歴史災害を復原して、そこから減災の知恵を抽出することで得ることができると考えている。

二 歴史災害の復原方法

さて、これらの歴史災害をどのようにしたら明らかにできるかについて、概略を記しておこう。まず、災害を記した史料（古文書やかわら版、古地図など）を読むことは、その詳細を知るためには必須の作業である。史料の多くは、図書館・資料館・公文書館などの公的な機関に保存されていることが多いが、寺社や旧家などに所蔵されている場合もある。これらのなかには翻刻されて刊行されているものもある。また、このような文字としてだ

けではなく、口頭で伝えられた災害もある。たとえば、言い伝えや物語などの中には、実際にあった災害がもとになったものがある。被災域など災害の空間的な広がりを知るためには、災害を記した古地図などがあると都合がよいが、これは意外に少なく、特に水害などに関してあまり存在していないのが実情である。火災に関しては、近世になるとかわら版などとして速報されたこともあって、かなりの数の史料がみつまっている。また、災害が絵として残されている場合もある。その他、地震では、断層や噴砂現象の跡が、洪水では落堀（おぼり）^{おぼり}（洪水の流水によって浸食されて堤内地にできたくぼ地）などの地形が、土石流では巨礫や砂礫層の存在が、火災では焼土層や炭などが、それらを推定させる証拠として地表面付近に残されている場合もある。

ところで史料からは、いつ・どこで・どのような災害が起こったかは判明するが、被災範囲を確定することが困難であることが多い。一方、前述の地形や地層などの証拠から、被災範囲を明らかにすることができる場合もあるものの、発生した年月日を特定することは難しいという課題がある。逆にいえば、これら二つの方法が有効に使える地域においては、かなりの精度で歴史災害の復原が可能となる。歴史災害の復原は、これらの方法を用いて、いつ・どこで・どのような種類の・どのくらいの規模の災害が発生したかなどに関する情報を明らかにすることで可能となる。

この他に、その災害からどのように復旧・復興したのか、その災害が現在にどのような影響を与えているのか、そこからのような減災の知恵を抽出できるのかなども、歴史災害の復原研究を通して知りたいことである。

歴史災害を知るためには、前述のような史料にあたればよいが、膨大な史料から必要となる史料を探すことは大変難しい。最もアプローチしやすいのは、公表されているデータベースを用いることである。たとえば、東京大学史料編纂所では、さまざまな史料のデータベースが作成されており、キーワードを入力することで、必要と

おわりに——「水」と「火」の記録から——

京都は、八世紀末の平安京建都以来、いく度となく災害に見舞われてきた。立命館大学二世紀COEプログラム研究の中で作成された「京都歴史災害年表」(『京都歴史災害研究』六)をみると、京都やその周辺では、ほとんど毎年のように、何らかの災害に関する記録が認められる。

たとえば洪水の場合、八世紀末―一四世紀末までの約六〇〇年間に、三六〇回余にわたって溢れていた事実を確認できる。これは、単純に平均して、一〇年間に約六回の割合で洪水に見舞われていた計算となる。洪水の記録はその後、室町時代から、本書の対象とした江戸時代以降にかけても継続していることが確認され、京都が頻繁に水からの被害を受けてきたことが想像される。また記録の大半は、京都市街地の東と西を流れる鴨川(賀茂川)や桂川(大堰川)が直接・間接に関係するものであった。「賀茂河の水」を「天下三不如意」の筆頭にあげて歎いた白河法皇ならずとも、水からの被害は川に囲まれた京都に生活する人々にとって、きわめて深刻な出来事の一つであったことは間違いないだろう。

さらに火災も、悩ましい災害の一つとして認識されていた。江戸時代に限っても、京都の市街地の大半を焼き尽くす大火が、少なくとも三度あった。宝永五年(一七〇八)、天明八年(一七八八)、元治元年(一八六四)の各大火がそれである。そのほか、当時、人口密度の比較的高かった西陣、下京、祇園界限、そして禁裏や貴族らの邸宅が密集していた今日の京都御所近辺一帯などが焼き尽くされた中規模の火災を含めると、その回数はいくらも多くなる。

江戸時代以前をみても、火災は、とくに南北朝の動乱期や応仁・文明の乱など、都とその周辺部をめぐる戦乱の中で多発したことが確認されるほか、平安・鎌倉時代においても決して例外ではなかった。たとえば、安元三年（一一七七）四月二十八日から翌二十九日にかけての大火（太郎焼亡）は、当時の市街地の約三分の一を焼き尽くした火災で、火元や延焼の具体的な範囲などについて、数多くの古記録や、『方丈記』『平家物語』などの文学作品に記録されている。また、建長元年（一二四九）三月二三日に発生した大火は、姉小路室町がその火元であったが、折からの強い乾風（北西風）にあおられて瞬く間に南東方向へと延焼し、ついに鴨川の広い河原を越えて、東側に位置していた蓮華王院や、その付近にあった新熊野社にまで及んだ。現在、蓮華王院の本堂は「三十三間堂」と通称されているが、この火災時には堂中に安置されていた千体千手観音立像の大半が被害を受けた。被害を受けた像は、火災後の鎌倉時代に再興されたものである。

このように大火の延焼力は、平安時代にはまだ機能していたはずの八丈幅（一丈は約三メートル）・一〇丈幅・一二丈幅など大路の道幅をもとせす、さらに広い間隔のあった鴨川までも容易に飛び越えてしまう、すさまじいエネルギーを持っていた。その具体的なようすは、『方丈記』の作者である鴨長明の表現を借りるならば、「吹き迷ふ風に、とかく移りゆくほどに、扇をひろげたるがごとく、末広になりぬ。遠き家は煙に咽び、近きあたりはひたすら焰ほを地に吹きつけたり。空には灰を吹き立てたれば、火の光に映じて、あまねく紅なる中に、風に堪へず、吹き切られたる焰、飛ぶがごとくして、一二町を越えつ、移りゆく」といったものであった。

大火だけに限らず、平安時代以降の京都で発生した火災の被害については、その具体的な被災域を書きとどめている記録が比較的多い。われわれは個々の火災記録と、かつて機能していた条坊制の道路網（大路・小路）および町割とを手がかりにして、現在の地図の中に四分の一町レベル（約六〇メートル四方）の、かなり正確な被災域を复原することができる。次に、個々の火災についての复原結果を、GISの手法を用いて発生順にオーバレイをしていくと、時系列の中での被災域を分析することが可能となる。すなわち、任意の期間別にどの地域において火災が多発していたか、また反対に少なかった場所はどこか、さらに火災多発域が空間的にみてどのように変化していったか、などの現象が一目で認識され、分析することができるのである。こうしたデータの提供は、京都をはじめとする歴史的都市において、歴史時代の都市構造や都市生活史、都市社会の実態などを分析しようとする研究者にとっての基本的な資料となるものである。

このようなわれわれの成果の一つに、一二―一三世紀の二〇〇年間にわたる火災の実態を分析した研究がある。火災発生の実態分析を通じて編者が最も驚いたのは、現在の四条烏丸から松原（旧五条大路）烏丸にかけての地域一帯に、一二回以上もの被災履歴が確認されたことである。この中で、最高の被災回数は実に一六回に及んでいた。これは単純平均で考えて、一二―一三年に一度、火災に見舞われていた計算となる。仮にある人物が活躍する年数を約三〇年だったと見積もると、一世代に二度の火災を経験したことを意味している。

同様のことは、繰り返し洪水の被害に遭いながらも、水辺の近くで居住を続けてきた鴨川流域の人々についても共通している。あの栄華を極めた藤原道長も、鴨河原にほど近い土御門殿を主な邸宅としていたし、またそのすぐ東側には法成寺を創建して晩年の心のより所とした。

これらの事実から生じてくる素朴な疑問は、この地に生活していた人々は決して京都というみずからの生活空間を離れることなく、災害後もそれまでの場所に住み続けてきたことである。それほどばかりか、繰り返し壊滅的な被害を受けながらも、「復興」という地道な努力や手続きを経て、同じ場所に都市活動を再生させ、さらに都市を発展させてきた事実である。なぜ、このようなことができたのか。

その疑問を解く鍵は、災害そのものを書きとどめた記録の中にあるのではないかと考えている。そしてまた、その記録を後世にまで懸命に残し続けようとした勤勉な努力の中にあるのではないかと考えている。記録の中には、その数こそ決して多くはないが、災害に対する記主の感想や反省などを記した個所が認められる。また、災害前後の記主や周囲の行動、あるいはその変化について触れている個所もみられる。そのような彼ら災害経験者による生の声から、われわれはそれぞれの土地の、災害に対するリスクを詳細に学び取ることができるのである。過去の災害の実態を把握することは、その土地の災害リスクを学ぶことでもある。そして、それぞれの土地に応じた災害リスクを正確に学ぶことは、その土地にふさわしい都市計画や復興への設計図を描くことにつながるのではないか。さらに、このような考え方は、ほかの歴史的都市ばかりではなく、今回、甚大な津波被害を受けた東北地方の太平洋沿岸地域にも応用できるのではないか。

平安京以降の歴史災害記録は、一二〇〇年間に及ぶ災害経験の積み重ねでもある。そしてこれらを正確に把握し、分析することは、一二〇〇年の災害を越えて生き抜いてきた京都からの、かけがえのないメッセージを伝えることでもあると考えている。

なお本書は、二〇一一年度の立命館大学学術図書出版プログラムにより出版助成を受けたものである。ここに記してお礼を申し上げたい。

片平博文
吉越昭久

水越允治 (みずこし・みつはる)

1930年生。東京教育大学大学院理学研究科修士課程修了。理学博士。三重大学名誉教授。
『古記録による13世紀の天候記録』(編著、東京堂出版、2010年)『古記録による12世紀の天候記録』(編著、東京堂出版、2012年)『文書記録による小氷期の中部日本の気候復元』(『地学雑誌』102-2、1993年)。

鈴木栄樹 (すずき・えいじゅ)

1953年生。京都大学大学院文学研究科博士課程修了。京都薬科大学薬学部教授。
『京都市の都市改造と道路拡築事業』(伊藤之雄編著『近代京都の改造』ミネルヴァ書房、2006年)
『田彦根藩士西村捨三における<京都の祝祭>、そして彦根』(丸山宏・伊従勉・高木博志編『近代京都研究』思文閣出版、2008年)『幕末の鴨川水害と鴨川浚計画』(『京都市政史編さん通信』41、2011年)。

小林丈広 (こばやし・たけひろ)

1961年生。金沢大学大学院文学研究科修士課程修了。奈良大学文学部教授。
『明治維新と京都——公家社会の解体——』(臨川書店、1998年)『京都町式目集成(叢書京都の史料3)』(京都市歴史資料館、1999年)『近代日本と公衆衛生——都市社会史の試み——』(雄山閣出版、2001年)。

中谷友樹 (なかや・ともき)

1970年生。東京都立大学大学院理学研究科博士課程修了。博士(理学)。立命館大学文学部教授。
『保健医療のためのGIS』(共著、古今書院、2004年)『健康と場所——近隣環境と健康格差研究——』(『人文地理』63-4、2011年)『「健康な街/不健康な街」を視る——GISを用いた小地域における地理的健康格差の視覚化——』(『日本循環器病予防学会誌』46(1)、2011年)。

冷泉 為人 (れいぜい・ためひと)

1944年生。関西学院大学大学院文学研究科博士課程修了。財団法人冷泉家時雨亭文庫理事長。立命館大学グローバル・イノベーション研究機構教授。
『冷泉家・藤番ものがたり——「和歌の家」千年をひもとく——』(日本放送出版協会, 2009年)
『公家町の成立と火災』(立命館大学文化遺産防災学「ことはじめ」篇出版委員会編『文化遺産防災学「ことはじめ」篇』アドスリー, 2008年)。

奈良 勝司 (なら・かつじ)

1977年生。立命館大学大学院文学研究科博士課程後期課程単位取得退学。博士(文学)。立命館大学文学部非常勤講師。
『明治維新と世界認識体系——幕末の徳川政権 信義と征夷のあいだ——』(有志舎, 2010年)『幕末政治と「決断」の制度化——江戸幕閣の動向からみる——』(『ヒストリア』223, 2010年)『徳川政権と万国対峙』(明治維新史学会編『講座明治維新2 幕末政治と社会変動』(有志舎, 2011年)。

朝田 健太 (あさだ・けんた)

1985年生。立命館大学大学院文学研究科博士前期課程中退。株式会社マツモト。
『データベースを活用した防災史研究の可能性』(『歴史都市防災論文集』2, 2008年)『大正期の京都における火災の分布——京都日出新聞記事のGIS分析——』(共同執筆, 『歴史都市防災論文集』3, 2009年)。

田中 哮 義 (たなか・たけよし)

1947年生。京都大学大学院工学研究科修士課程修了。工学博士。京都大学名誉教授。立命館大学グローバル・イノベーション研究機構教授。
『改定版 建築火災安全工学入門』(日本建築センター, 2002年)『火災と消火の理論と応用』(共著, 東京法令出版, 2005年)『建築物の煙制御計画指針(案)』(共著, 日本建築学会, 2011年)。

岡田 篤 正 (おかだ・あつまさ)

1942年生。東京大学大学院理学研究科博士課程修了。理学博士。立命館大学グローバル・イノベーション研究機構教授。
『九州の活構造』(共編著, 東京大学出版会, 1989年)『野島断層【写真と解説】兵庫県南部地震の地震断層』(共編著, 東京大学出版会, 1999年)『近畿の活断層』(共編著, 東京大学出版会, 2000年)。

寒川 旭 (さんがわ・あきら)

1947年生。東北大学大学院理学研究科博士課程修了。理学博士。産業技術総合研究所客員研究員。
『秀吉を襲った大地震 地震考古学で戦国史を読む』(平凡社新書, 2010年)『地震の日本史増補版 大地は何を語るのか』(中公新書, 2011年)『日本人はどんな大地震を経験してきたのか 地震考古学入門』(平凡社新書, 2011年)。

川崎 一 朗 (かわさき・いちろう)

1946年生。東京大学大学院理学研究科博士後期課程修了。理学博士。立命館大学グローバル・イノベーション研究機構教授。
『スロー地震とは何か』(日本放送出版協会, 2006年)、『災害社会』(京都大学学術出版会, 2009年)、『修学院離宮周辺の地球科学的環境』(共同執筆, 『歴史都市防災論文集』5, 2012年)。

西山 昭 仁 (にしやま・あきひと)

1971年生。大谷大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。東京大学地震研究所地震火山情報センター特任研究員。
『元暦二年(1185)京都地震の被害実態』(『月刊地球』23-2, 2001年)『安政南海地震(1854)における大坂での震災対応』(『歴史地震』19, 2004年)『寛文二年(1662)近江・若狭地震における京都での被害と震災対応』(『京都歴史災害研究』5, 2006年)。

北原 糸 子 (きたはら・いとこ)

1939年生。東京教育大学大学院文学研究科修士課程修了。文学博士。立命館大学グローバル・イノベーション研究機構教授。
『地震の社会史』(講談社学術文庫, 2000年)『日本災害史』(編著, 吉川弘文館, 2010年)『日本歴史災害事典』(編著, 吉川弘文館, 2012年)。

大 邑 潤 三 (おおむら・じゅんぞう)

1986年生。佛教大学大学院文学研究科修士課程修了。佛教大学大学院文学研究科博士課程在籍。

伊津野 和 行 (いづの・かずゆき)

1960年生。京都大学大学院工学研究科修士課程修了。博士(工学)。立命館大学理工学部教授。
『構造力学』(共著, 森北出版, 2009年)『交通ネットワークを支える免震と制震の技術』(共著, 土木学会, 2012年)『基本的な断面形状の橋梁に作用する津波外力に関する実験的研究』(共同執筆, 『土木学会論文集』A2-67-2, 2011年)。

諏訪 浩 (すわ・ひろし)

1946年生。京都大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学。理学博士。東京大学空間情報科学研究センターおよび立命館大学歴史都市防災研究センター客員研究員。同志社大学理工学部嘱託講師。
『地すべり移動体の運動像とその特性: 地すべりと地質学』(共著, 古今書院, 2002年)『昭和28年有田川水害(シリーズ日本の歴史災害6)』(共著, 古今書院, 2006年)『Characterization of debris flows by rainstorm condition at a torrent on the Mount Yakedake volcano』(共同執筆, *Geomorphology* 136, 2012)。

赤石(河角)直 美 (あかいし(かわすみ)・なおみ)

1976年生。立命館大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。立命館大学文学部非常勤講師。
『近代の中国山地西部における水田開発と環境利用変化』(『歴史地理学』47-5, 2005年)『地籍図・土地台帳を用いた水害被災地の復原——京都市左京区大原上野を例に——』(『歴史都市防災論文集』1, 2007年)『土地台帳に記された近代の自然災害への対応』(『京都歴史災害研究』10, 2009年)。

深川 良 一 (ふかがわ・りょういち)

1953年生。京都大学大学院工学研究科修士課程修了。工学博士。立命館大学理工学部教授。
『最新土質力学(第2版)』(共著, 朝倉書店, 2003年)『Slope stability analysis and discontinuous slope failure simulation by elasto-plastic smoothed particle hydrodynamics (SPH)』(共同執筆, *Geotechnique* 61, 2011)『新型スウェーデン式サウンディング試験機による仙台城石垣崩壊部・非崩壊部の地盤特性調査』(共同執筆, 『地盤工学ジャーナル』7-1, 2012年)。

執筆者紹介 (収録順, *は編者)

*吉越昭久 (よしこし・あきひさ)

1948年生。立命館大学大学院文学研究科博士課程中退。立命館大学文学部教授。
『都市の水文環境』(共著, 共立出版, 1987年) 『人間活動と環境変化』(編著, 古今書院, 2001年)
『アジアの都市と水環境』(共編著, 古今書院, 2011年)。

塚本章宏 (つかもと・あきひろ)

1978年生。立命館大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。立命館大学衣笠総合研究機構ポストドクトラルフェロー。
“Unfolding the landscape drawing method of rakuchū rakugai zu screen paintings in a GIS environment” (*International Journal of Humanities and Arts Computing* 3(1-2), 2009) 「歴史的建造物の被災履歴と火災図を統合した「天明の京都大火」被災範囲の復原」(共同執筆, 『歴史都市防災論文集』5, 2011年) 「近世京都の刊行都市図に描かれた空間」(HGIS研究協議会編『歴史GISの地平——景観・環境・地域構造の復原に向けて——』勉誠出版, 2012年)。

高橋 学 (たかはし・まなぶ)

1954年生。立命館大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。立命館大学文学部教授。
『平野の環境考古学』(古今書院, 2003年) 「土地の履歴と阪神・淡路大震災」(『地理学評論』69-7, 1996年) 「列島をめぐる地理的環境」(井上勲編『日本史の環境』吉川弘文館, 2004年)。

*片平博文 (かたひら・ひろふみ)

1950年生。立命館大学大学院博士課程中退。博士(文学)。立命館大学文学部教授。
『サウスオーストラリアの農業開発——小麦栽培地域の歴史地理——』(古今書院, 1995年) 「山背の古道を地名から探る——広隆寺を通過する「斜めの道」の存在——」(『地名探究』8, 2010年) 「地理から見える枕草子の風景」(『中古文学』87, 2011年)。

山崎有恒 (やまざき・ゆうこう)

1964年生。東京大学大学院人文科学研究科博士課程満期単位取得退学。立命館大学文学部教授。
『地域政治と近代日本』(共著, 日本経済評論社, 1998年) 『大正期「京都日出新聞」にみる京都の防災思想・技術・システムとその変容』(編著, 立命館大学歴史都市防災研究センター, 2008年) 『昭和期「京都日出新聞」にみる京都の防災思想・技術・システムとその変容』(編著, 立命館大学歴史都市防災研究センター, 2010年)。

渡邊泰崇 (わたなべ・やすたか)

1983年生。立命館大学大学院文学研究科博士課程前期課程修了。ヤギェヴォ大学ポーランド語・文化センター単位履修生。
「GISを用いた歴史災害の時空間分析——12世紀平安京の火災を事例に——」(共同執筆, 『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』15, 2007年)。

きょうと れきしさいがい
京都の歴史災害

2012(平成24)年8月31日発行

定価: 本体2,300円(税別)

編者 吉越昭久・片平博文

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-751-1781(代表)

装幀 上野かおる(鷺草デザイン事務所)

印刷 株式会社 図書印刷 同朋舎

© A. Yoshikoshi & H. Katahira 2012

ISBN978-4-7842-1643-7 C1021